

論文の要約

論文題目 森春濤の香奩體詩受容と漢詩創作
——韓偓の香奩詩から森春濤の艶體詩へ

氏名 陳文佳

第一章 韓偓の事蹟に関する再考證

韓偓の生涯の事蹟について、未だに未明なところが多い。たとえばその字は、北宋以來何説もある。『新唐書』卷一八三「韓偓列傳」、晁公武『郡齋讀書志』卷四は「致光」と記しているが、計有功『唐詩紀事』卷六十五、陳振孫『直齋書錄解題』卷五は「致堯」と記載している。また、胡仔編『苕溪漁隱叢話』前集卷二十三と後集卷十五に「韓致元」という條目ある。「致元」説は傍證がないため、早くに研究者らに否定され、胡仔の書寫のミスだと思われる。『四庫全書總目』卷一百五十一「韓内翰別集一卷江蘇巡撫採進本」の條下に、『列仙傳』の記載を引用して「致堯」説は「於義爲合」と述べている。ただ韓偓と同じ時代の吳融の詩集『唐英歌詩』卷上のうちに「和韓致光侍郎無題三首十四韻」がある。これは韓偓の字についての最古の記録である。一方、確かな證據がない限り、韓偓没後一番早い資料の『新唐書』と『郡齋讀書志』の記録は簡単に否定できない。

また、韓偓詩特にその『香奩集』のなかの作品を十分に理解するためにはその生涯の事蹟を辨明する必要がある。本章では、韓偓の詩と従來の韓偓關聯の文獻資料を踏まえて、彼の及第前の事蹟、江南・隰州・并州への旅の目的と時期、また唐滅亡後、閩地に入った後の事蹟について詳しく考證している。詩人・政治家としての韓偓の人物像は少し明白になるだろう。これもまた彼の香奩詩創作の目的や詩の深意の探究にとって役に立つと思っている。

第二章 韓偓『香奩集』の刊行及び日本での流佈と影響

現存する『香奩集』の版本はおおよそ九種類が残る：『玉山樵人集』附『香奩集』一卷、『唐音統籤』本二卷、『全五代詩』本一卷、毛晉汲古閣刻本一卷、『唐詩百名家全集』本三卷、『全唐詩』本『香奩集』一卷、清人王遐春麟後山房本『香奩集』三卷、清人吳汝綸評註『韓翰林集』本三卷と館柳灣・卷大任同校、江戸萬笈堂刊『韓内翰香奩集』三卷

などがある。一卷本・二巻本・三巻本の形態はそれぞれ異なっている。ただ三巻の『唐詩百名家全集』本、王氏麟後山房本、吳汝綸評註本、江戸萬笈堂刊本、また『全唐詩』本は同じ編年本として、所収の詩は少し食い違いがあるが、詩の配列順ほぼ同じであるため、かつて同じ祖本があったのではないかと考えられる。

一方、日本で『香奩集』が刊行され、影響を及ぼすのは、江戸時代中期以降のことである。現存する最も古い和刻本は、文化年間、館柳灣・卷大任同校、江戸萬笈堂刊『韓内翰香奩集』三巻である。また、文化八年から明治初期にかけて数多くの覆刻本が刊行されている。卷大任は萬笈堂刊本の跋文で此本の由来にわずかに言及したが、どんな底本を使って書き寫したのか明言をしていない。ただ卷氏が使った底本も三巻本の可能性が高いと考えられる。

現存する三巻本『香奩集』は『唐詩百名家全集』本、『中晩唐五家集』本と吳汝綸評註『韓翰林集』附本三種類があり、すべて清以降の刊本である。『唐詩百名家全集』本『香奩集』は康熙四十一年（1702）、王氏麟後山房本『香奩集』は嘉慶十五年（1810）に刊行されたので、時間から推算すれば、卷氏がこの二つの三巻本の何れかを目にし、或いは書き寫すことは可能ではある。そしていろんな状況から見れば、卷氏は『唐詩百名家全集』本を底本として手録した可能性が極めて高いと思われる。

江戸末期から明治期にかけて、森春濤一派の漢詩人らが韓偓の『香奩集』を極めて推賞し、艶體詩の創作にも力を注いだという文学現象は、江戸時代の和刻本『香奩集』の刊行・流佈と直接的関係があるかも知れないと考えられる。また、漢詩人らの「香奩集」に対する關心は和刻本『香奩集』が續續と再刊された要因の一つと言ってもいいであろう。

第三章 韓偓の香奩詩から春濤の艶體詩へ

明治の漢詩人森春濤は唐の韓偓の香奩體詩の影響を受け、艶體詩の創作を通じて当世の漢詩壇に多大な影響をもたらした。春濤艶體詩の中の場面や情景は韓偓香奩詩を繼承する痕跡は明らかである。女性の容貌や姿態、その繊細な感情、曲折な心理まで緻密に描かれることも春濤艶體詩と韓偓香奩詩の共通点である。四季折折（特に春と秋）の風物から女性のイメージに聯想し、または物事を女性の容姿に喩えて吟詠するのは、春濤艶體詩の一特色である。なお、韓偓香奩詩の創作趣旨をめぐって色色論争があったが、ただ詩の内容から見ると、女性の容姿・情緒を緻密に描寫する以外、女性の才能や人格への關心には一切触れていない。一方、森春濤の女性に対する關心は、女性の容姿・感情だけではなく、むしろ女性の文學的才能や人格を一番重視する。生涯相次いで三人の妻を失った春濤は多数の悼亡詩を詠った。春濤悼亡詩の一部は艶體の風格が強く感じられるが、妻の文學的才能への關心、妻の人格への尊重、また妻の感情への共鳴が詩の主題である。そこで従

來の香奩詩と比べてずいぶん風貌が違うだろう。

東京移住後の春濤はその艶體詩の創作趣旨を、彼の頻繁な社會活動から窺い知ることができる。当時、春濤は詩社を巧みに運営して明治政府の高官を社に入れ、彼が漢詩壇に於いての主導地位を固めている。詩歌創作上では、春濤独特の優美纖細・豔冶憂愁の詩風を運用し、當世の詩的審美の氣風を唱導している。春濤はその晩年になって名声が更に高まり、遂に漢詩壇の盟主となるということは、彼の艶體詩の創作、また一世を風靡するように努めることに大いに關係があると考えられる。

第四章 森春濤の王士禎受容について

明治初期の詩壇をリードした森春濤の唱導によって清詩の大々的な流行があったといわれる。春濤以前の漢詩壇の領袖、大沼枕山が稱揚したのが南宋の陸游をはじめ、蘇・黄・范・楊など宋代の詩人であったが、春濤一派の漢詩人は六百年以上の時を越えた宋人の詩よりほぼ同時代のものである清人の詩を熱心に読み、そして積極的に学んだ。そこで春濤の王士禎受容に論及しなければならない。『春濤詩鈔』卷七のうちに「秋柳四首、用王漁洋韻」、また「疊韻」四首、全部八首の次韻詩が載っている。戊午の大獄のさなかであったその時期、故郷の一宮に隱居生活を送っている春濤は初めてその作品のなかに王漁洋詩を受容した痕跡が読み取れる。王士禎の「秋柳四首」は様様な典故をちりばめながら、複雑な多義性を含ませた作品であるため、一字一句作者の本意を究明するのは難しい。従って「秋柳四首」が誕生して以来、詩の本事に關して諸説紛紛として意見がまとまらない。そして春濤の次韻詩をよく吟味すると、やはり漁洋の原作と違う情趣を味わうことができる。故事がちりばめられた春濤の次韻詩は漁洋から学んだ神韻詩の詩風と春濤從來の艶體詩風があいまって新鮮な響きがある傑作だが、詩の主旨に關して、おそらく詩人の本意は故人を弔うことであろう。

また、三十代の後半から春濤は相次いで三人の妻を喪い、いずれの妻を喪った時にも複数の悼亡詩を手向けている。一方、漁洋も妻との縁に恵まれず、相次いで三人の妻を病氣で喪って、そして亡き妻たちのために數多くの悼亡詩を作った。漁洋の悼亡詩のなかに女性的な趣味があふれる作品が多いため、「哀豔淒惻」という評價を得ている。春濤の悼亡詩は積極的に漁洋の悼亡詩を受容し、さらに自らの艶體詩風と融合して新たな境地を拓いたと言ってもよいのだろう。

第五章 森春濤と陳碧城

明治十三年(1880)二月、森春濤の息子槐南が著した戯曲『補春天傳奇』（漢文）一冊、

また春濤の門人永坂石埭が訓譯した『補春天傍譯』一冊が刊行された。『補春天傳奇』は清の嘉慶・道光朝の詩人陳文述（號碧城）が明末の才女馮小青を哀悼し、その墓道を修繕したという逸話を踏まえた上で創作した物語である。主人公の陳碧城は清朝の一流詩人ではないため、當時中國の詩壇ではあまり注目されていないが、日本では、文久元年（1861）櫻井成憲が抄録した『陳碧城絶句』二卷、明治十年（1877）森春濤が編集した『陳碧城絶句』（『清三家絶句』其二）、明治十一年（1878）春濤が出版した『廿四家選清廿四家詩』の卷下に収められる陳碧城詩、また明治十二年（1879）市村水香が編集した『頤道堂詩鈔』四卷など、續續と出版された。幕末明治初期の漢詩人らは陳碧城の詩に對して深い關心と興味を持っているに違いないだろう。

槐南はその「補春天傳奇」のなかで「情種」という概念を運用して、陳碧城の溫柔多情の人物像を描き出した。陳碧城は世間の非難を顧みず、女弟子を廣く納め、數多くの香奩體詩を詠った。そして杭州西湖の孤山で前代の才女馮小青・楊雲友・菊香三人の墓を建て、墓誌を撰し、詩文集『蘭因集』を編集した。春濤は陳碧城の人格に傾倒し、その「情種」のイメージの影響を受け、自らを「情天教主」と稱した。また、春濤は陳碧城の香奩詩に大變興味を持ち、陳氏『頤道堂外集』のなかの香奩詩に次韻した作品もあり、『陳碧城香奩詩』三冊を編集したこともある。そして、春濤は陳碧城香奩詩の詩語を吸収して自分の艶體詩に取り入れている。『槐南集』卷三「讀陳雲伯『頤道堂集』」十六首の題記によると、春濤が『頤道堂外集』を購入したのは岐阜移住前の明治五年冬のことだとわかる。ただいろいろな状況から見ると、それより前に春濤はすでに陳碧城の作品に接觸した可能性が高いと考えられる。春濤は單なる陳碧城香奩詩の詩風を愛好するだけでなく、碧城詩のなかの女性の人格・才能への關心は、春濤の最も贊同するところだろう。

第六章 森春濤と『新文詩』シリーズ

明治四年春、京都で出版した『明治三十八家絶句』のなかに掲載する春濤詩の數は同輩詩人小野湖山・大沼枕山らに超え、一位となった。春濤は當時の漢詩壇において、その實力と聲望はすでに世人に認められている。恐らくこれがきっかけで春濤は毅然として一家を擧げて新都東京に移住しただろう。東京移住後の春濤は、茉莉吟社を起し、明治政府の高官を詩社に入れ、頻繁に宴飲集會・詩歌唱和をしている。それと同時に春濤は當世漢詩人の選集『舊雨詩鈔』や『東京才人絶句』を編集し、清朝詩人陳碧城・郭頻伽らの作品を積極的に明治の漢詩壇に紹介した。また、春濤入京後の文學活動として最も注目すべきなのは漢詩文雜誌『新文詩』シリーズの創刊と編集だと思われる。明治八年（1875）七月、春濤は『新文詩』の創刊に著手し、十一月に『新文詩』の第一集を發行し、明治十七年十二月まで全部で百集の『新文詩』を編集・出版した。また、明治九年（1876）の春に『新文

詩別集』一號を編集し、明治十七年(1884)十月まで全部で二十八集の『別集』を出版した。

『別集』が停刊後、春濤はまた明治十八年(1885)五月に『新新文詩』を創刊し、明治十九年(1886)十月まで合計十七集の『新新文詩』を出版した。『新文詩』第一集の出版から『新新文詩』の停刊まで、春濤は詩人としてその最も大切な十一年餘の歳月を『新文詩』シリーズの編集と出版に捧げた。そして春濤・槐南父子の努力で『新文詩』シリーズはついに明治初期の最も影響力の大きい漢詩文雑誌になった。

『新文詩』に掲載する漢詩はおおよそ三種類に分けられる：一．交遊酬唱詩。二．時事詩と詠史詩。三．艷體詩。春濤は巧に茉莉吟社を運営して、頻繁な詩歌集會を通じて江湖派と台閣派詩人の交流を實現した。一方、漢詩人としての春濤は明治維新の新時代に期待を寄せ、當時の内政や外交の事件に関心を持っている。春濤一派の漢詩人は『新文詩』シリーズに数多くの時事詩、また歴史に借りて時事を風刺する詠史詩を掲載し、尊王攘夷の政治思想を示している。そして春濤が最も力を入れたのは艷體詩の創作である。明治十三年(1880)三月、春濤は六十二歳の誕生日の前に「詩魔自詠」十二首を詠い、堂堂と「永劫不磨脂粉氣、詩魔賴得竝文妖」と宣言している。たとえ世間に非難されても決して艷體詩の創作を諦めないという春濤の決意を示しているだろう。

春濤の漢詩創作と『新文詩』シリーズの編集は明治初期の漢詩壇に大きな影響をもたらした。春濤はこれによって漢詩人としての名聲が上がり、ついに明治詩壇の盟主のような存在になった。また、彼が東京で茉莉巷賣詩店を經營し、茉莉社同人の詩文集を發行・販賣している。本章の最後では春濤のこれらの文學・社會活動の動機について少し考察を加えてみる。